

# 那珂 60

—那珂遺跡群第125次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1155集



2012

福岡市教育委員会



那珂  
60

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第一五五集

10  
11

福岡市教育委員会

# 序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、博多区竹下五丁目地内における共同住宅の建設に先立って行われた那珂遺跡群第125次調査の報告書です。

那珂遺跡群は、これまでの発掘調査の成果により、弥生時代から古墳時代前期、および古墳時代後期から奈良時代において、福岡平野の中でも規模かつ中心的な遺跡群であったことが判明しています。特に弥生時代中期から古墳時代前期においては、北側に隣接する比恵遺跡群とともに、『魏志倭人伝』に見える「奴国」の拠点遺跡と推定されており、これまでにも様々な構造や遺物が検出されています。

本調査でも、弥生時代から古代、中世にいたるまでの非常に濃密な分布を示す集落跡を検出しました。特に弥生時代の溝は、広い集落を区画したものとみられ、集落構造を考える上で重要な発見です。また、巴形銅器の鉄型は、全国3例目の発見であり、那珂遺跡群に「奴国」の中枢的な青銅器工房の一部が存在した可能性をうかがわせるものとなりました。さらに、この鉄型から想定される巴形銅器は、「伊都国」の王墓とされる井原鋪構道路（糸島市）の巴形銅器に類似しており、「奴国」と「伊都国」の関係性を追究する上で、非常に貴重な発見となりました。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、研究資料として、また地域の歴史の学習の材料として活用して頂きましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力をいただいた、調査委託者をはじめとする関係各位の方々に対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井 龍彦

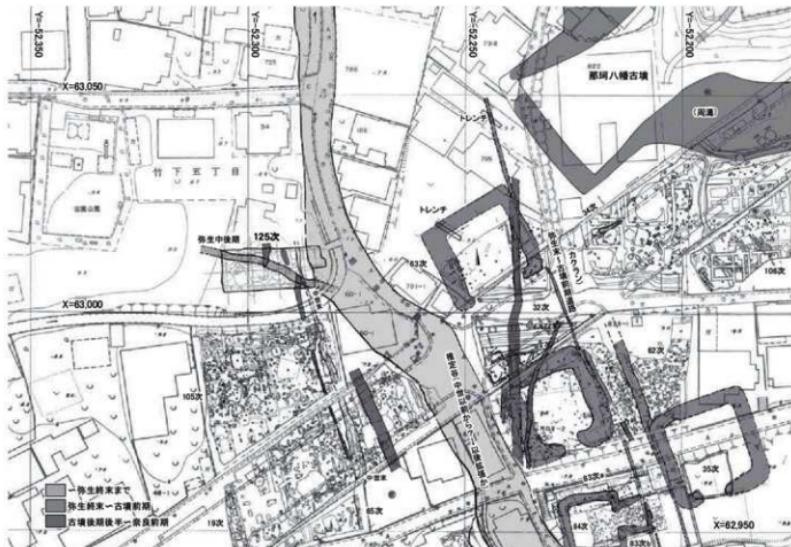


図1 那珂125次調査地点の位置と周辺調査区(1/1,000)  
(※ X, Y座標は日本測地系(第II系)による国土座標値)

# 本文目次

I.はじめに	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査の組織	3
3. 遺跡の立地と周辺の歴史的環境	4
II.調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 検出遺構	5
(1) 弥生時代条溝	5
(2) その他の溝状遺構	10
(3) 積穴建物（住居）およびその可能性のあるもの（S C）	11
(4) 井戸（S E）	20
(5) 土坑（S K）	24
3. 出土遺物	24
(1) 青銅器鋳型	24
(2) 土器・陶磁器	26
(3) 飛鳥～奈良時代の瓦	26
(4) 石器・石製品	26
(5) 鉄製品・鉄滓	26

## 例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成21年6月5日から同年7月22日まで発掘調査を実施した、共同住宅の建設に伴う、那珂遺跡群第12次調査の報告書である。なお、発掘調査費用は一部に国庫補助金を適用している。
2. 発掘調査は、共同住宅建設工事によって影響を受ける範囲について行った。遺構の呼称は記号化し、溝状遺構をS D、積穴建物（「建物」とは限らないので「建物」とする）をS C、井戸をS E、土坑をS K、柱穴などピット状遺構（自然遺構を含む可能性あり）をS P、細立柱建物や柱穴列遺構をS B、性格不明確をS Xとしている。
3. 本書の遺構図に用いる方位北は、日本測地系（第II系）における国土座標北としていたが、校正段階で座標系の入れ込みが誤りであることが判明した。遺構図の方位北は国土座標真北から45° 東へズレている。調査区の座標は任意のものである。任意座標のY軸方向北は真北（国土座標北）から45° 西偏している。国土座標については、教育委員会埋蔵文化財課が那珂遺跡群に設置している測量基準点の座標値から移動して、これを調査区に入れ込んだが、移動途中で誤りが生じたようである。調査区の位置は、周囲地図などを測量して道路台帳地図上に調査区を入れている。また調査区内の標高は、上記の測量基準杭のレベルから移動して用いている。
4. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住および榎木義嗣（当時・埋蔵文化財第1課）、小畠薫（当時・福岡大学大学院、現・福岡県教育委員会）、西拓巳、安武憲史（当時・福岡大学大学院）、山崎悠都子（当時・別府大学大学院）、坂口剛毅（発掘調査技能員）が行ったほか、文化財部文化財担当職員諸氏の助力を得た。遺物の実測は、土器・陶磁器類を上方高広、平川敬治（整理技能員）、石田智子（九州大学大学院）、角信吾（当時・東海大学学生）、西拓巳が行なった。其類の実測は、比嘉えりか（埋蔵文化財第2課）および山崎悠都子が行った。また、鉄製品等を西澤千絵里（埋蔵文化財センター嘱託）が、剥片石器類を吉留秀敏（埋蔵文化財第2課）が、その他の石器・石製品を上方がそれぞれ実測を行なった。鋳型は久住および一部を後藤直（前・東京大学教授）、井上義也（春日市教育委員会）が実測し、吉留秀敏の協力を得た。図版は、遺構図面を絹谷歩（九州大学大学院）、宇野美嘉、加集和子（整理作業員）。および久住がを行い、遺物実測図は、一部を久住が行ない、剥片石器類を立石真二（整理技能員）が行ったが、多くは埋蔵文化財第2課文化財担当職員がかの助力を得た。本書に用いる写真是大部分を久住が撮影し、遺物の一部を音波正人（埋蔵文化財第2課）が撮影した。
5. 本書の執筆と編集は久住（現・文化財整備課）が行った。なお諸般の事情から、本書は主要遺構の概要報告と出土遺物実測図の提示に留まり、遺物の説明や主要遺構以外の遺構についての十分な報告ができなかつたので、青銅器鋳型（鋳型は実測図である）の詳細を含めて何らかの形で追加報告をしたいと考えている。
6. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

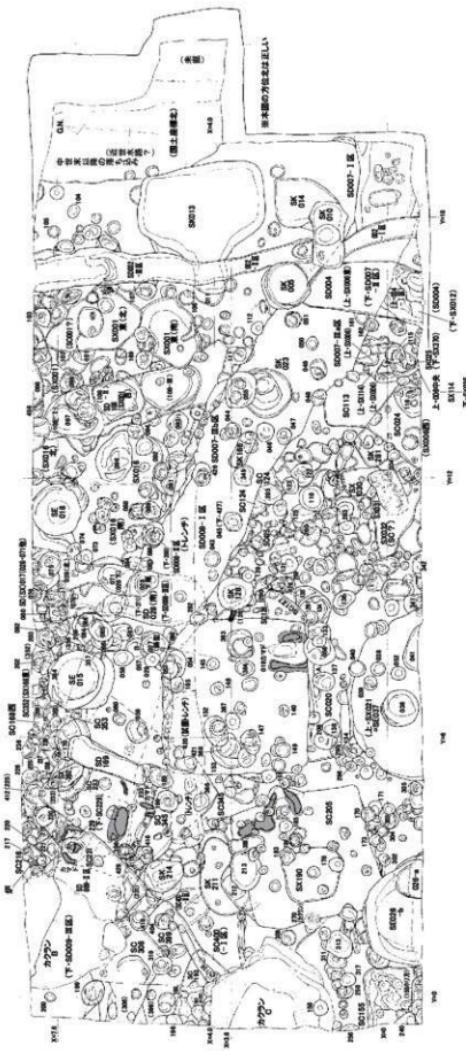


図2 那珂125次遺構分布全体図 (1 / 100)

## I . はじめに

### 1 . 調査に至る経緯

平成21年(2009年)4月7日付で、博多区竹下五丁目36番地内における共同住宅建設工事に関して、文化財保護法第93条に基づく事前届出が福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課事前審査係に提出された(事前審査番号21-2-14)。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群(分布地図番号37-0085)の範囲内であり、周囲の発掘調査および確認調査の成果から、当該地においても埋蔵文化財が存在する可能性がきわめて高いと判断され、届出の建設工事内容では、工事の影響が埋蔵文化財に及ぶことが懸念された。そのため申請者に対し、まず工事対象地における埋蔵文化財の確認調査が必要である旨の回答をえた。その後、申請者の合意を得て、対象地において平成21年5月7日に確認調査を行った。その結果、弥生時代から古墳時代の遺構と遺物が確認され、予定される建設工事を行う場合には、事前に埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査が必要であるとの結論に達した。その後、埋蔵文化財第1課と申請者側との協議の結果、記録保存のための発掘調査を共同住宅建設工事で影響が及ぶ範囲について行うことで合意を得た。そして、平成21年6月1日付で、個人事業者を委託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が福岡市との間で締結された。

発掘調査は、現地における本調査を平成21年6月5日から同年7月20日まで行うこととし、平成22年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。また調査費用については、当該建設工事が個人事業者によるものであるため、本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助金適用要項に基づき、委託者による原因者負担分とともに一部について国庫補助金を適用することになった。

本調査は、平成21年6月5日に開始した。本調査では、当初の予想よりも濃密な遺構が検出されたこと、また梅雨の雨量が多かったこともあり、期間内の終了が危ぶまれたため、委託者側と協議を行い、調査期間の日数の延長について了承を得た。本調査は、平成21年7月22日に終了した。資料整理および報告書作成については、当初契約では平成22年度に行う予定であったが、諸般の事情により、平成22・23年度の2ヶ年とすることで合意を得た。

### 2 . 調査の組織 (平成21年度:本調査年度、平成22~23年度:整理・報告年度)

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣(平成21・22年度)、酒井龍彦(平成23年度)

調査総括 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第1課長 濱石哲也(平成21年度)

埋蔵文化財課第2課長 田中壽夫(平成22・23年度)

埋蔵文化財第1課調査係長(平成21年度)、埋蔵文化財第2課調査第1係長(平成22・23年度) 米倉秀紀

事前審査 埋蔵文化財第1課事前審査係 藏富士寛(平成21・22年度)、木下博文(平成23年度)

調査担当 埋蔵文化財第1課調査係 久住猛雄(平成21年度、平成22・23年度は文化財整備課)

庶務担当 文化財管理課 山本朋子(平成21年度)

埋蔵文化財第1課管理係 井上幸江(平成22・23年度)

本調査では非常に濃密な遺構が検出されたが、これを限られた期間で発掘して記録保存を行う必要があったため、文化財部文化財専門職諸氏より、入れ替わり応援をいただき、遺構削除から遺構実測にいたるまで大変ご協力を得た。報告書作成においても、遺物実測および、特に各図面のトレースに関して埋蔵文化財第2課職員および技能員諸氏のご協力をいただいた。青銅器鋳型については、後藤直、柳田康雄、岩永省三、田尻義了、井上義也、常松幹雄、吉留秀敏ほかから様々なご教示を得たが、今回は諸般の事情

により不十分な図面の提示に留まり、また各氏のご教示を反映させることができなかつた。鉄型についてはあらためて図化を行い、次年度発行の『福岡市埋蔵文化財年報』などで補遺報告する予定であり、ご寛恕いただきたい。また以上の調査・報告にご協力いただいた方々に対し感謝申し上げたい。

### 3. 遺跡の立地と周辺の歴史的環境

那珂遺跡群は、福岡平野の中央、東西を中小河川に挟まれた洪積丘陵（段丘）に立地する。北側の比恵遺跡群や、南側の五十川遺跡とは同一段丘上で連続している。特に比恵遺跡群は、その間に段丘鞍部（浅谷部）があるが、遺構の分布や変遷様相から弥生時代から古代では実質的に同一の遺跡群と捉えられ、「比恵・那珂遺跡群」と総称される。弥生時代終末から古墳時代前期には、両遺跡群を貫通する全長1.5kmの道路遺構が存在し、「列島最古の都市」としての評価もある（註1）。弥生中期から古墳前期前半には遺構が段丘全面に展開するが、前期後半以降は遺構が激減してしまう。しかし後期中頃（TK 10期）から遺構が再び増大し、比恵では「那津官家」とされる三本櫛郭施設に囲まれた大型倉庫群が6世紀後半に成立する（8・72次、39次、109次ほか、註2）。那珂では飛鳥時代前半に、推定5×5間の大型建物（68次）、初期瓦を伴う方形環溝（23・114次）や大型掘立柱建物群（115次）などが出現し、「筑紫大宰」との関連が推定され（註3）、遺跡群南端の大型建物（37・52・117次）は「磐瀬宮（長津宮）」の一説もある（註4）。その後、7世紀末以降の古代には那珂評価（のち郡衙）が設置された可能性がある。遺跡群の詳細は既刊の各報告書の記述にゆずり（註5）、以下は本報告書調査地点周囲について述べる（図1）。125次地点の東約70mには、副次主体から三角縁神獣鏡が出土した那珂八幡古墳がある（第141集）。中央主体は未調査だが、出土土器から築造が庄内式期に遡る可能性がある全長約85mを測る九州最古の古墳である（註6）。墳丘南側裾部下の弥生時代後期の井戸からは中広銅戈鉢型が出土した（那珂1次、註7）。また南側周溝中層（34次）には初期瓦が多数出土し（註8）、南側の62次や北東側の13次（第222集）からも軒丸瓦を含む初期瓦の出土があり、近隣の未調査地に初期官衙ないし寺院遺構の存在が予想される。35・62・63・83・84次では古墳時代初頭～前期の周溝墓（小古墳）群が存在し、前述の「道路」に沿って造営されている（註9）。63・32・62・83次地点の東側には古くより「谷」が存在し、近世以降に谷水田開発で東西に拡張されたと考えられる（大正初期の旧地形図に水路がある）。125次の南側から東側に屈曲する水路は、東側はこの谷を利用するが、南側は近世初頭までの遺構分布から、本来は段丘が南北に続いていたものを水路掘削で断ち切ったのだろう。19次（第323集）では初期瓦が多数出土した飛鳥時代の溝があり（溝4）、同地点の別の大溝（溝9）は北の105次（SD24）、125次（SD004）に継ぎ（図3）、「谷」の西側のどこかにも瓦葺建物を伴う初期官衙遺構群が存在したのだろう。推定だが、125次の北側40mに南辺が来る東西135m×南北115mの区域がそれに相当する可能性があり（第983集-Fig.2）、その北西部では7世紀中頃（須恵器IV-4～V期）の、初期瓦を伴う正方位の大型建物の検出がある（115次）。



写真1、重機による表土掘削直後の遺構検出状況  
(遺構高密度のため、真っ黒な「包含層」状に見える。)

### II. 調査の記録

#### 1. 調査の概要（図2・3、巻末抄録）

調査地点は那珂遺跡群中央部西側に位置する（図1）。調査区の東側は自然にやや低くなり、さらに東側は水路となるが、南側は水路で急な落ち込みとなる。調査区周囲の標高は、西側が8.4～8.7m、東側が8.1～8.3mである。遺構検出面は西側が浅く、標高もやや高くなる。東縁部では急激に低くなるが、これは近世水路の掘り方である。遺構検出面は、西側がGL-30～40cm、中央がGL-40～50cm、東側がGL-60～70cmで、全体にローム地山の露出しは僅かである（写真1、PL.3-5,6）。壁面土層の觀察によれば、遺物を多く含む堅くしまった暗褐色～黒

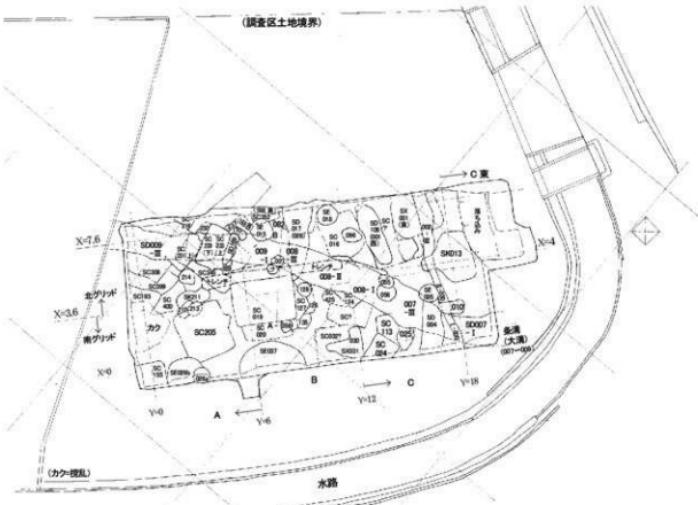


図3 那珂125次調査区周辺図およびグリッド配図(1/250)  
 (注:校正段階で、本図の国土座標軸X・Y座標は誤りであることが判明した。  
 正しい方位は図1を参照されたい。任意座標Y軸方向北が真北から4.5° 西である。)

褐色土の検出土層は周囲調査の遺構覆土と同一で、遺構検出はやや難しいが可能であり、竪穴のカマド上面もこの面で検出した。また中世以降の遺構は、さらに上位が遺構面となる(PL 3-2, 3参照)。本調査では期間的問題から、この面での遺構検出は十分できなかつたが、暗褐～黒褐色土層以下を「包含層」としてグリッド調査し(図3, PL 3-5, 6)、多量の遺物を検出した。調査区東縁を除く東半部の遺構密集範囲では、この面から15～20cmで竪穴建物群の床面直上となり、そのレベルで遺構を検出した。西半部では、「包含層」を10cm前後下げたレベルで遺構を検出し、東半よりは遺構密度がやや薄く(ただし平均的遺跡よりはるかに濃密である)、多くの竪穴建物等を把握した。

確認調査の試掘トレンチでは、遺構が密集する「包含層」状柄位を掘り抜いて竪穴住居貼床下部を遺構面と判断してしまったが(PL 3-4)、比惠・那珂遺跡群においては、本地点のように遺構が密集して「包含層」状を呈する場合がこれまでもあり(比恵 18・53・91・102 次ほか、那珂 62・75・115 次ほか)、今後の事前審査において注意すべき課題である。このような場合、「黒い黒」の土層であり、確かに遺構把握が難しいが、多量の遺物引出する場合は特に要注意であり(本トレンチも条溝最上層トレンチ底より上でかかり、遺物が多数あった)、可能な限り試掘トレンチの壁面土層を精査することが望ましいと考える。

検出土層はきわめて多い。弥生時代条溝を含む状溝遺構7、竪穴建物推定30前後、井戸6、土坑(大型柱穴含む)20以上のほか、各時期の大小の柱穴が調査区全面に分布するが、遺構が多くなるため掘立柱建物の復元は困難で、これを断念している。出土遺物は、絶量中型パンケース60箱前後である。その内訳は図9～28と卷末の「報告書抄録」を参照されたいが、特筆すべきものとして中広銅戈・巴形銅器鋲型片2点(同一個体)がある(図9)。遺物量では、大溝出土の弥生時代土器と、古墳後期～飛鳥時代の土器・瓦類が比較的多い。一方、周囲の調査区によっては多く出土する古式土師器(古墳時代初頭～前期土器)はほとんど出土していない。

## 2. 検出土層

(1) 弥生時代条溝(図4、PL. 1-3・2-1~4・4-2~6・5-1~9)

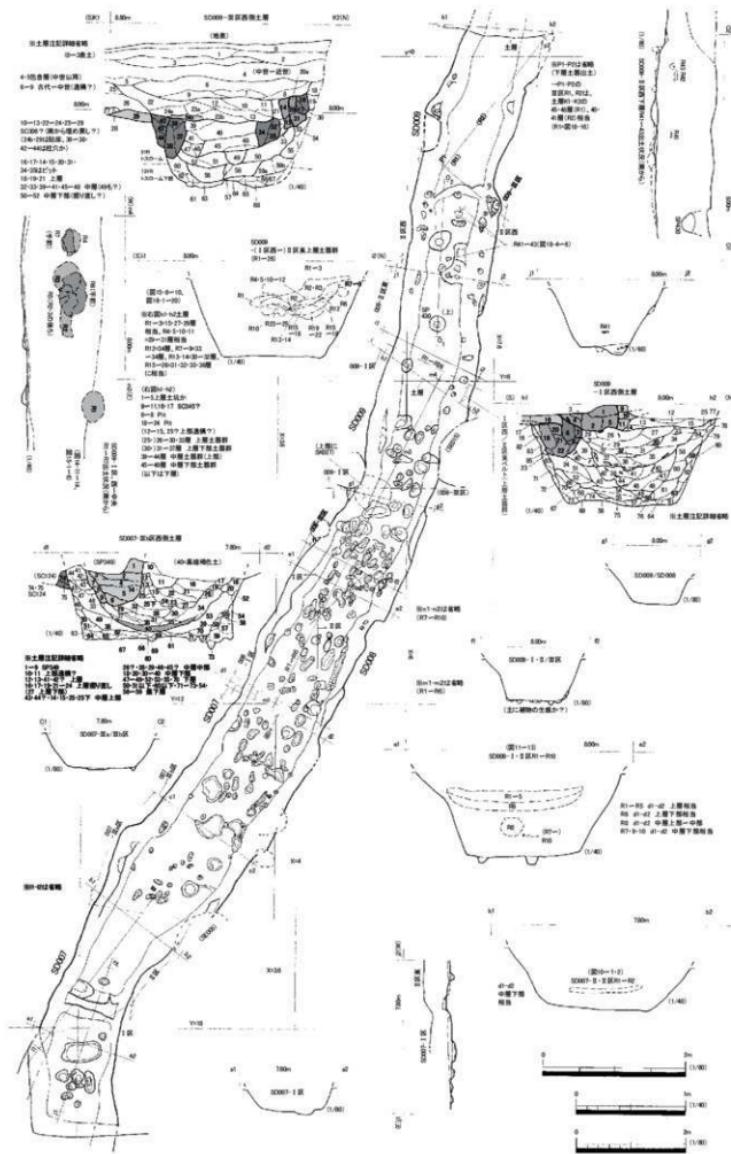


図4 弥生時代条溝(大溝)SD007・008・009平面図(1/80),断面図(1/40, 1/60, 1/80)

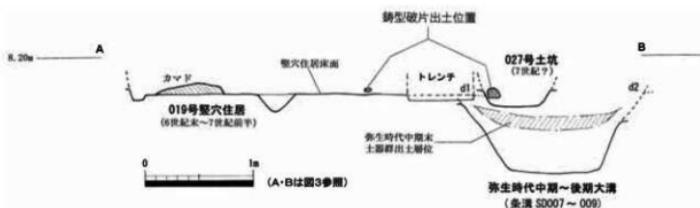


図 5 那珂125次巴形銅器鋳型出土状況断面図(1/40)

弥生時代の条溝は、調査区の北西から南東に続く、幅1.8~2.4m、断面逆台形の長大な溝で、調査区外の東西へ延びている。調査範囲は全長35m、溝は直線的だが若干蛇行する。当初、上部に遺構群が多く重複していたため、便宜的に東からSD007、SD008、SD009として分けたが、そのまま報告する。下層出土土器から弥生時代中期中頃（須玖I式新相）の擦削剤であり（図18-4～6）、中層～上層の各所において、中期後半、中期末、中期末／後期初頭、後期初頭の各時期の土器群の一括施णが認められた（図10～17、「中期末／後期初頭」は柳田康雄編年後期1段階古相に相当、註10）。（※26頁凡例参照）



写真2. 弥生時代条溝と鋳型出土位置

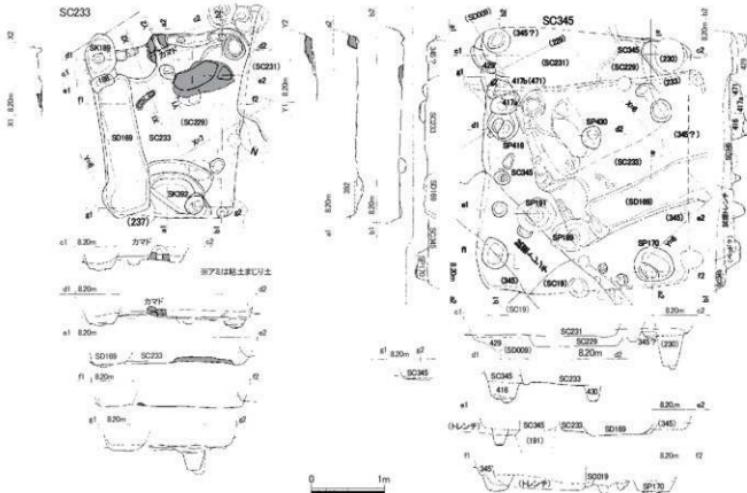


図6 堅穴建物 実測図(1)(SC233, SC345)(1/60)

※図6以下、遺構図「北」は真北から45.8°東である（例言および図3注釈参照）。

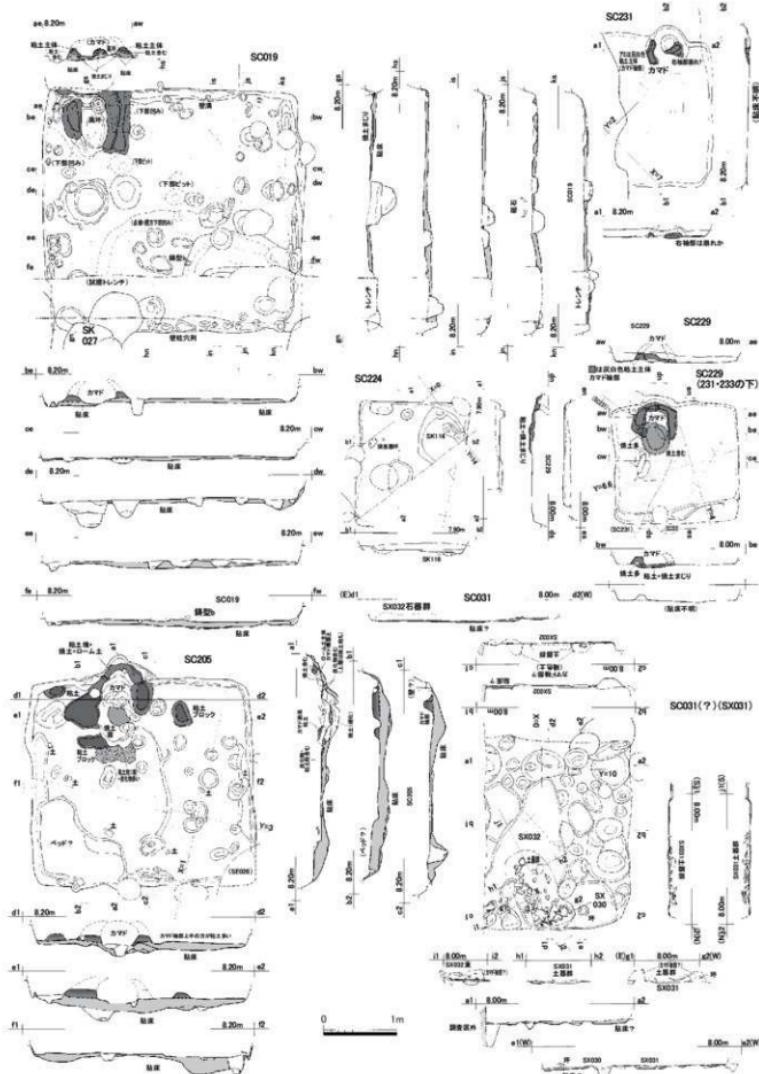


図7 堅穴建物実測図(2) (SC019-231-024-229-205-031) (1 / 60)  
 (※方位北については例言と図3を参照。)

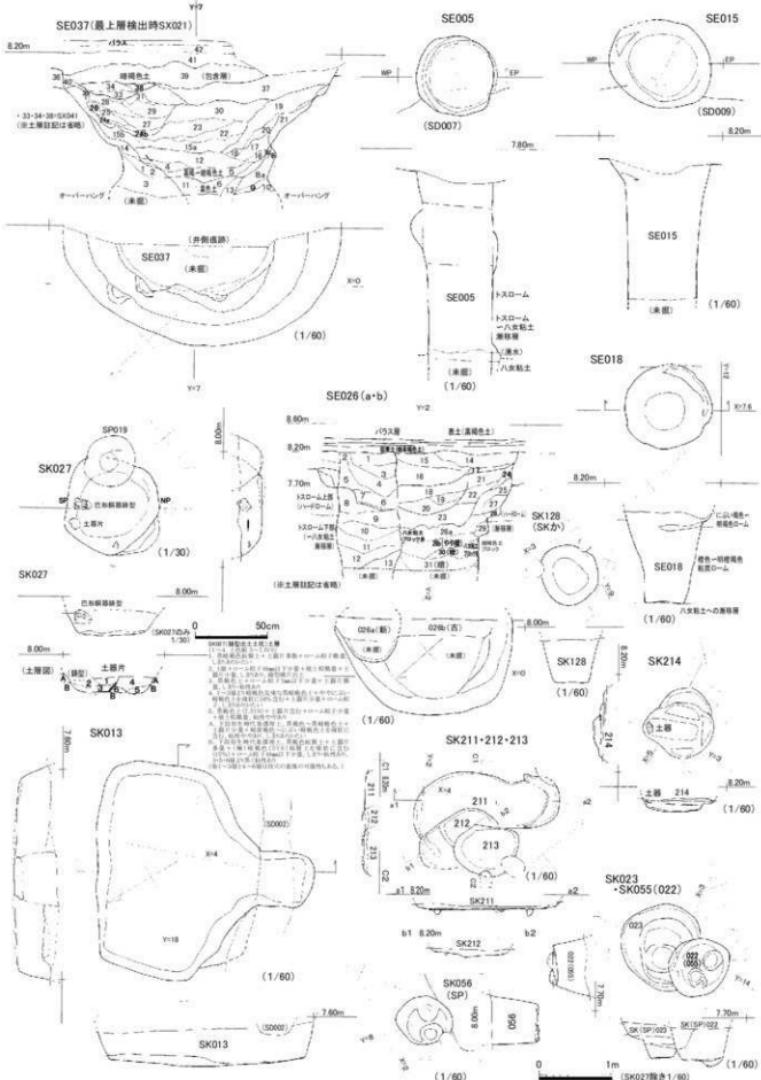


図 8 井戸および土坑実測図 (1/60, SK027のみ 1/30)  
(\*方位北については例言と図 3 を参照。)

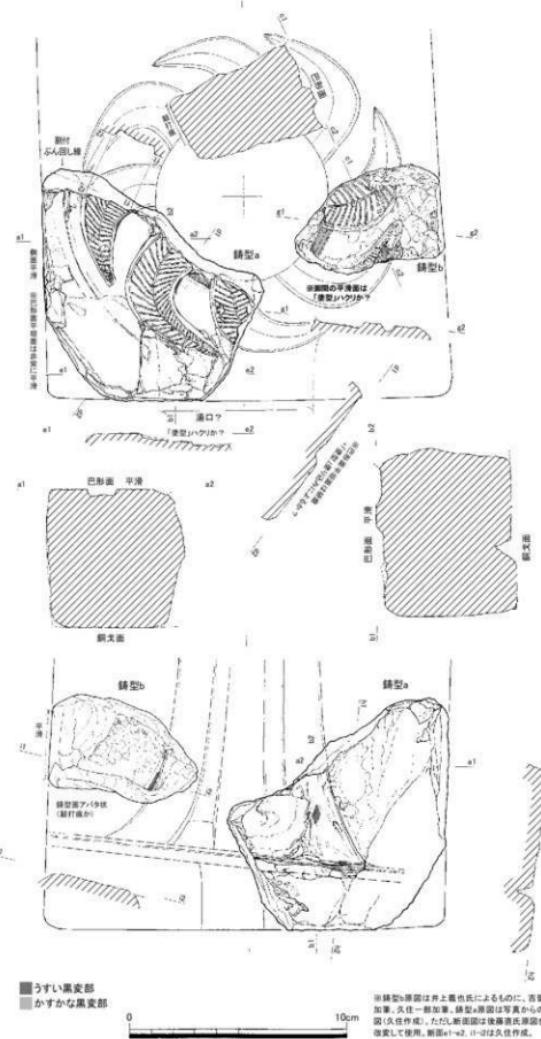


図9 青銅器鋳型(巴型銅器・中広銅戈鋳型)実測図(1/2)

最上層には後期前半以降の土器が少量出土する。また土層断面を検討すると、埋没過程で後期初頭までの間に、數回以上の再掘削や溝濠えがあったと考えられる。

溝の底面はSD007- II 区／I 区、SD009- III 区／II 区の各境界で西から東へ段状に低くなる。全体的には、SD007 東端が西側 SD009 より低く、排水機能も想定される。底面には大小の不定形なビットがある。これらは植物の生死や水流による凹凸(抉れ)が含まれると考えるが、一部の土坑状凹みは人為的であろう。また、溝底面端にビットが並ぶような部分 (SD007- III b 区～SD009- I 区北側) や底面に集中する部分 (SD008- I・II 区西～SD009- I 区東) があり、逆にほとんどない部分もある。この分布の差は、溝がある程度埋没した時点では杭列などが打ち込まれた範囲とされなかった範囲の差である可能性も残る。

なお、条溝上層を切る2道構から青銅器鋳型が計2片出土しているが、本来は条溝の上層上部に廃棄されていた蓋然性が高い(図5、写真2)。そなならば、後期初期またはそれ以降の層位に属していたことになろう。

## (2) その他の溝状遺構

溝は他に 6 条ある（図2-3）。SD002 は水路を挟んだ南側の 105 次 SD08 の続きとみられ、中世後期以降、調査区壁面の土層観察では、包含層上部から掘りこみが

ある。SK013 を切る。SD004 は非常に浅い遺存だが、105 次 SD24 の延長線上にあり、飛鳥～奈良時代か。SD156 は竪穴建物群を切り、覆土が SD169 と類似し中世だろう。SD169 は土坑状の溝で、13 世紀頃。SD017 や SD028 は同一遺構の中での掘り直し。最大幅 1.2 m。須恵器編年（編年は第 983 集 pp. 29-31、第 1034 集 pp. 16-17 を参照）ⅢA～ⅢB 期。SX001(SC?) の西側下部で検出した SD108 も同様の溝幅で、平行しないが、SD117(028) と対になる道路側溝であった可能性が生じる。その場合、SK128 と SK055（図 8 右下）が対になり門柱と考えることもできる。何れもⅢA～ⅢB 期の土器が出土する。「道路」と門柱を想定した場合、調査区北側隣接地に特別な施設の存在が想定されよう。

### (3) 竪穴建物（住居）およびその可能性のあるもの（SC）

竪穴建物（図 6・7、PL. 6）は 10 棟前後は確実で、一部プランの検出や貼床痕跡の凹凸範囲などから 30 棟前後の存在が推定される。古墳時代後期～飛鳥時代が主体で、一部に弥生時代と奈良時代末期～平安時代初期がある。古墳後期以降の竪穴の多くは粘土混合土で構築したカマドを有するが、方位はまちまちで、主柱が不明なものが多い。カマドがあっても「住居」とするには非常に小さいものもあり、「竪穴建物」として「住居」以外の機能も考慮する。基本的に大半が貼床を有するが、条溝上層で検出した竪穴は、条溝覆土との差異が不明確で貼床が把握できなかった。SC233（図 6 左）は 2.2 × 2.5 m と小規模だがカマドが南側にある。「住居」ではなく炊事小屋であろう。SC229 の上

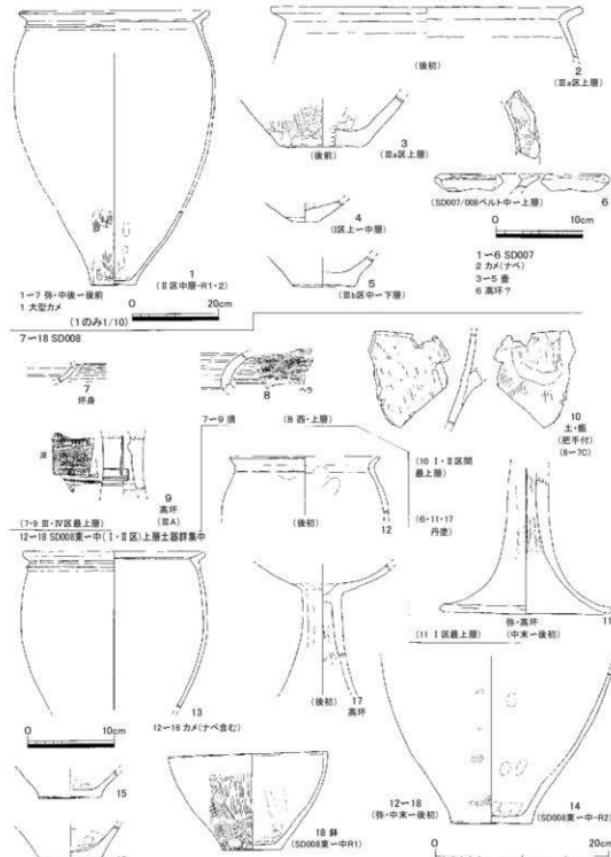


図 10 条溝 SD007, SD008 最上層～上層(中・東)土器群集中(1/5, 1/10)

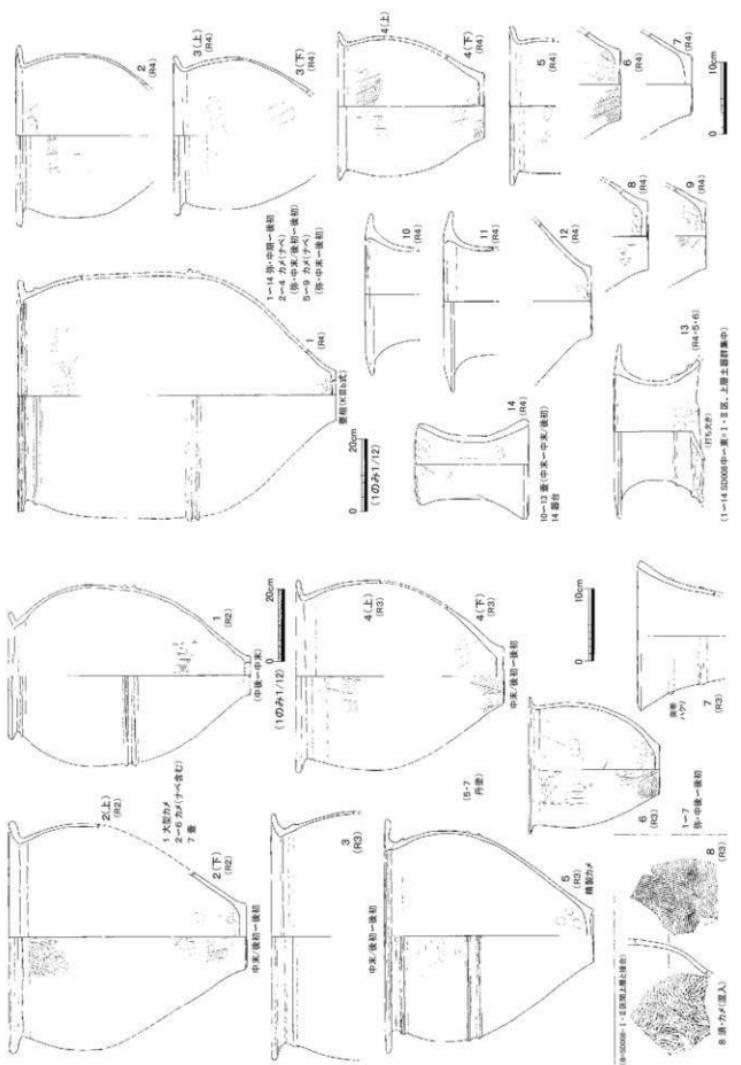


図11 条津SD0008 中～東上層土器群集中 R 1～R 6 (1) (1/6, 1/12)

図12 条津SD0008 中～東 R 1～R 6 (2) (1/6, 1/12)

で、SC231に切られる。IV期前半。SC345(図6右)は推定 $2.8 \times 3.5$ mの規模で住居か。カマドは不明。南隅側がやや高くベッド状。III B期～IV期古相。SC019を切る。SC019(図7左上)は $3.4 \times 3.6$ m。試掘トレンチで北側一部が裁断され

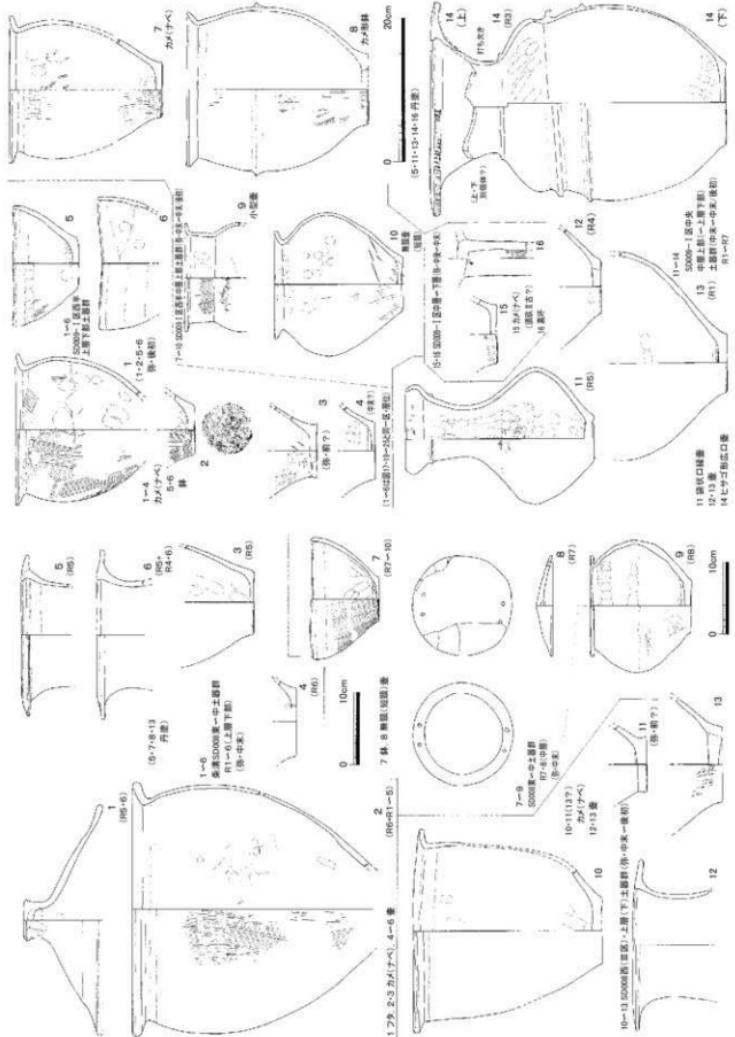
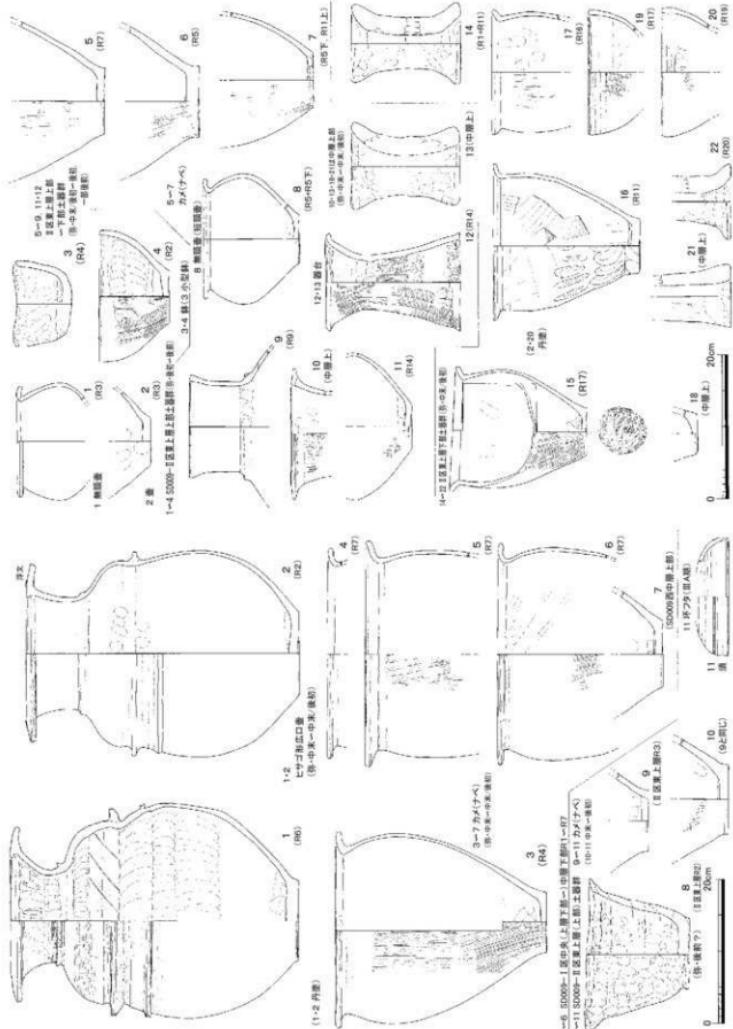


図13 条原SC2008 中～東上層下部土器群・中～東中層土器群・上層下部(西)土器群 (1/6)

図14 SC2008 1区(西)上層下部～中層上部土器群、1区中層以下 (1/6)

る。カマドは南東隅にある。カマド封じ（祭祀）で高杯が伏せてあった。中央北側から鑄型bが出土。北西側床面が低くなる。III B期。SC205（図7左下）は2.8×3.1m。東側にカマドの煙道が突出する。北西側がベッド状。貼床が厚いが、



掘方中央は島状に高い。(PL. 6-5)。IV期前半。(→ 20 頁)

図16 条溝SD009- II 区(東)上層土器群(上)～上層土器群(中)～下) (1.1～)

図15 条溝SD009- I 区(Ⅳ)(上層下部～)中層上部土器群(2), II 区上層土器群(上部)

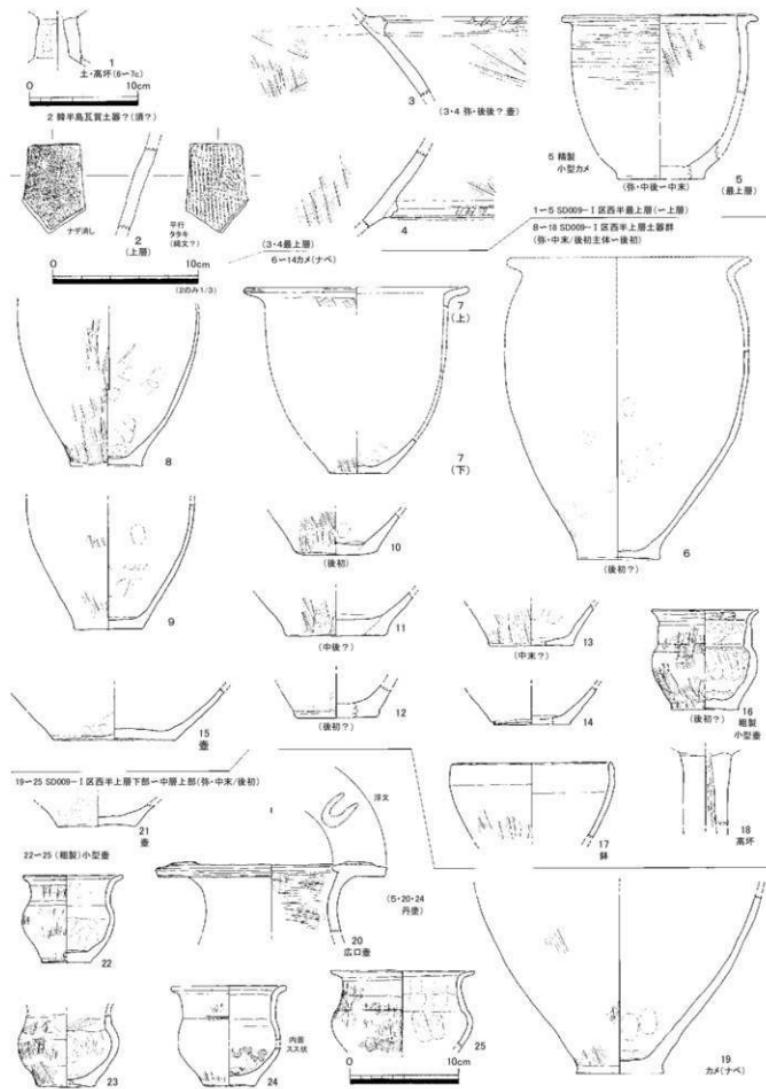


図17 SD009- I 区上層～I 区西上層(下)～中層(上)土器群(1) (1/4)

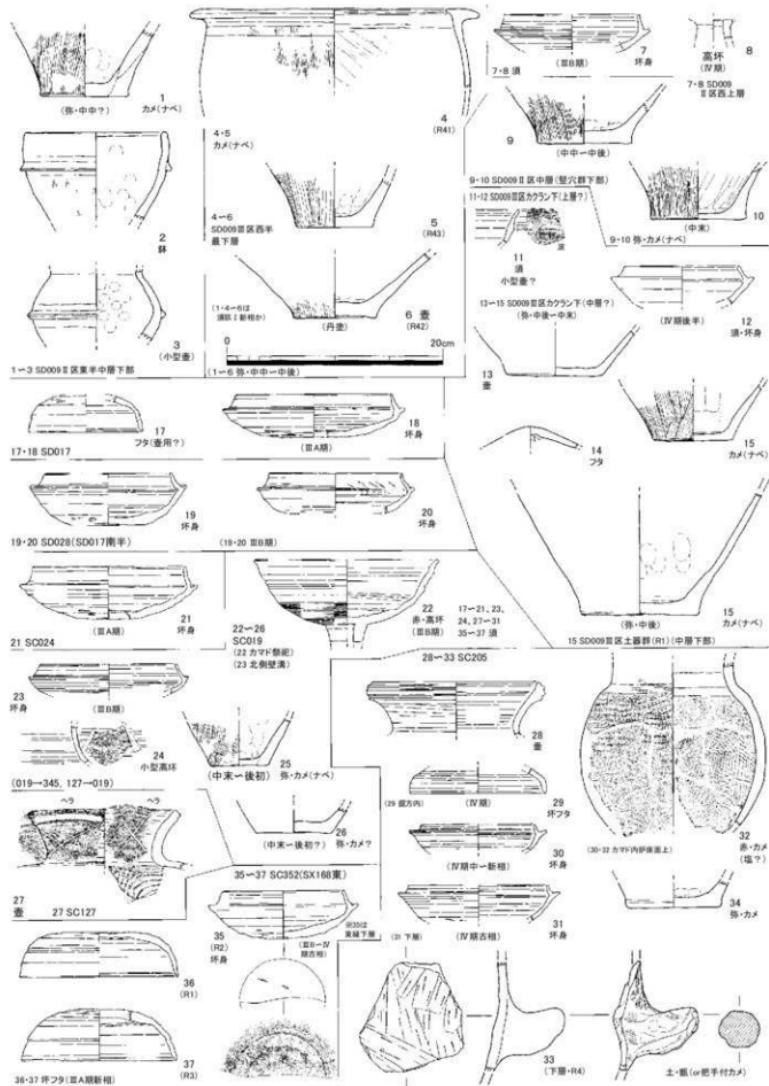


図18 SD009 II区東半中層下部・II区西半上～中層・III区出土土器、その他溝(SD)出土土器、竪穴(SC)出土土器(1) (1/4)

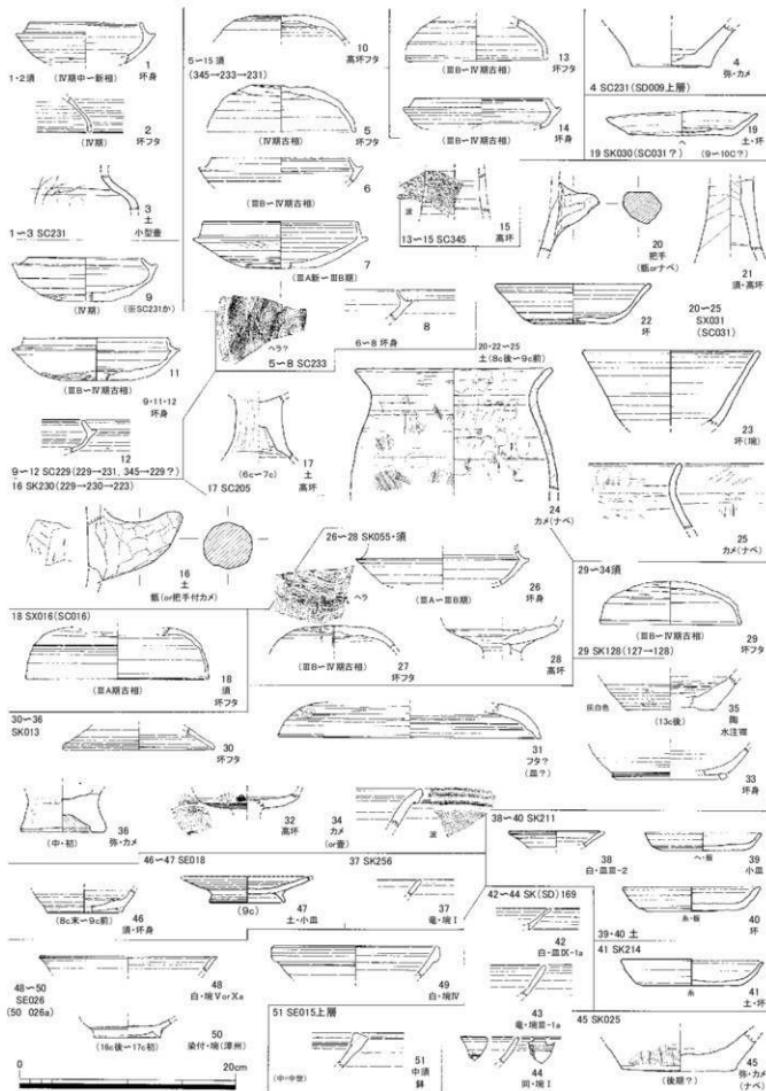


図19 壺穴(SC)出土土器(2), 土坑(SK)出土土器, 陶磁器, 井戸(SE)出土土器, 陶磁器(1) (1/4)

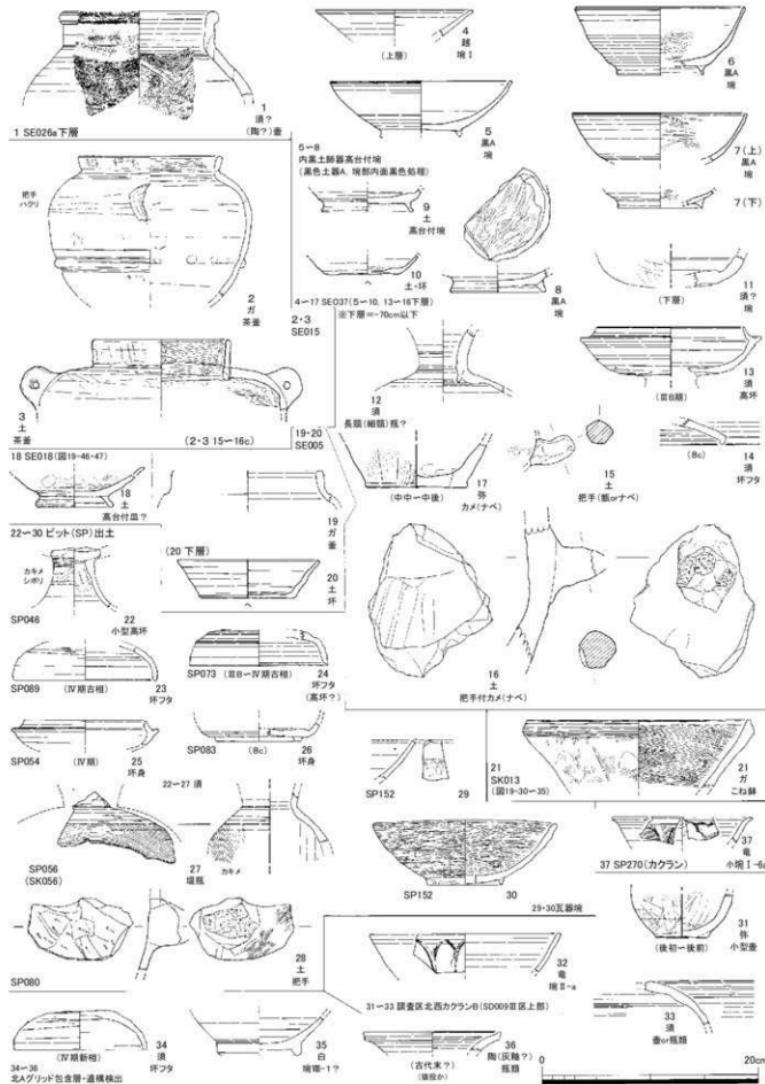


図20 井戸(SE)出土土器・陶磁器(2), ピット(SP)出土土器, 挿乱・包含層出土土器・陶磁器(1) (1/4)

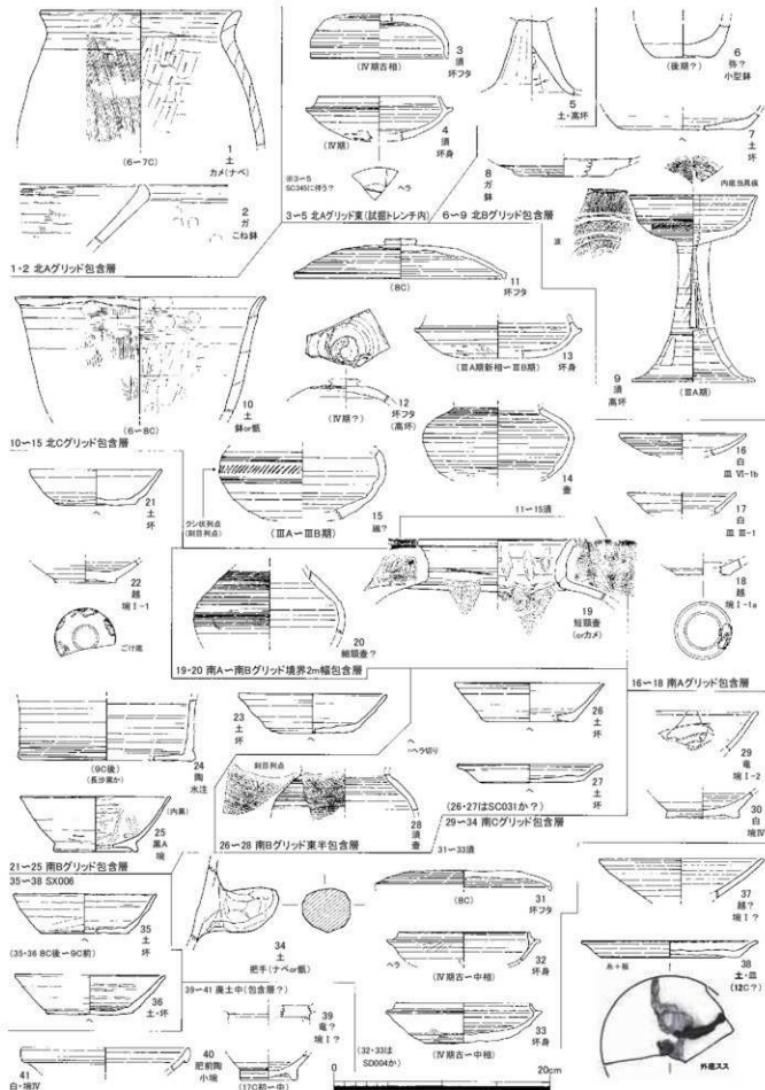


図21 包含層(遺構検出)出土土器・陶磁器(2), 南CグリッドSX006出土土器, 廃土検出陶磁器 (1/4)

SC231は一辺2.1mの極小竪穴(図7右上)。北側にカマドがあり、SC233と同じ炊事小屋か。SC233を切り、IV期中～新相。SC229(図7右中)は1.7×1.75mの極小竪穴だが北側にカマドがあり、炊事小屋か。南辺は棚状に少し高い。III B期か(図19-9は上部SC231からの混入か)。SC024(図7中)も1.5×1.75mの極小竪穴で、カマドは不明で(南側調査区外?)、納屋もしくは炊事小屋か。III A期。SC032(図7右下)は、当初SX030・031・032と周囲の深い土坑・ピット状凹みの群集として把握したが、竪穴建物の貼床の凹凸範囲として推定した。SX031土器群一括は、東側のみ上部掘り込みが見えたが他は不明確であり、掘方としたのはカマド袖部を掘り間違えたと考える。SX031には図化していないが、**移動式カマド土器**の破片がある。土器群は9世紀初頭～前半で(図19-19～25)、SE037の廃棄時期(図20-4～17)とほぼ同じで、瓦片も出土した(図22-1.25-1.2.13)

(4)井戸( S E ) 井戸は6基検出した(図8)。SE037(図左上)は径3.9mの大型井戸。土層から井戸側があつた可能性が考えられる。廃棄時期の9世紀の土器・黒色土器(図20-4～17)に混じって、初期瓦が多数出土した(図22～24)。SE005、SE015、SE018は何れも径1.1～1.5mの円形素掘り井戸。SE018は浅いが、他は深く完掘を断念した。(→24頁)

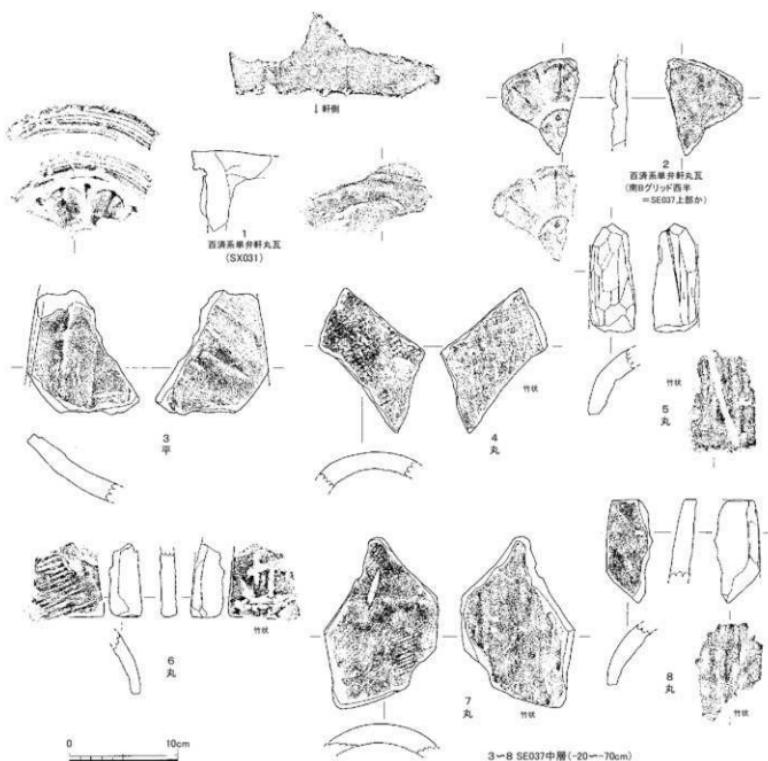


図22 那珂125次出土軒丸瓦、SE037出土瓦(1) ※「竹状」=竹状模骨

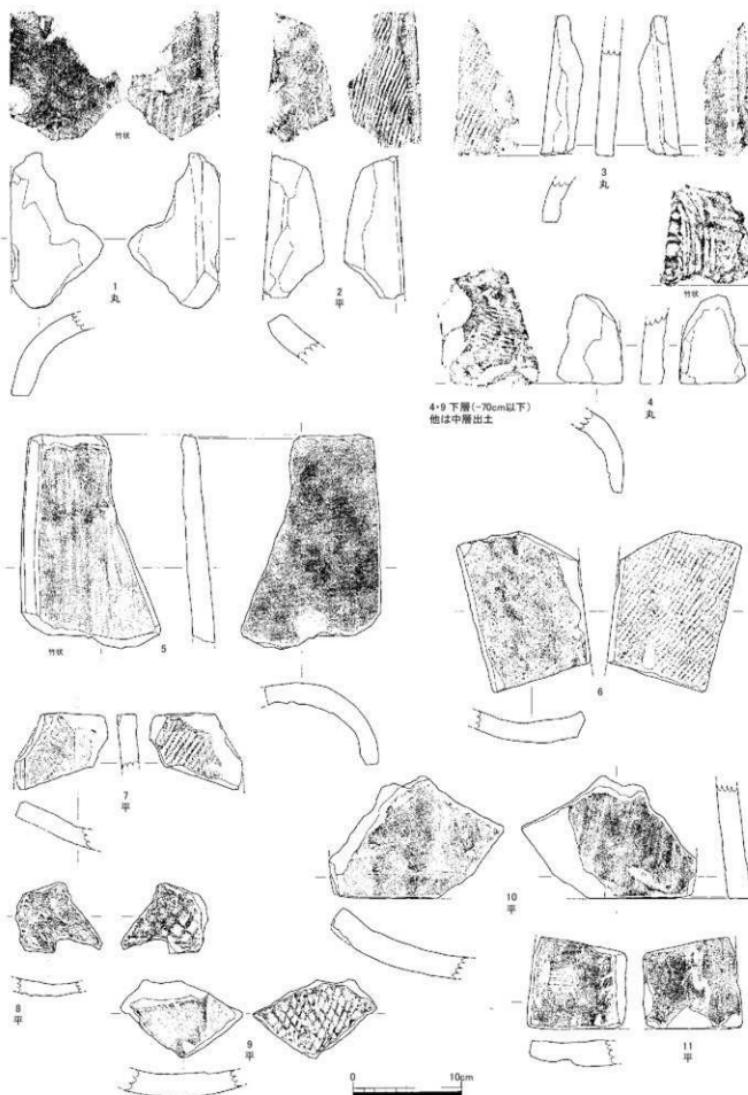


図23 SE037出土瓦(2)(1/4) 本図22~25の瓦は全て初期瓦(6c末~7c後)または古代瓦(7c末~8c)である。前者が主体。

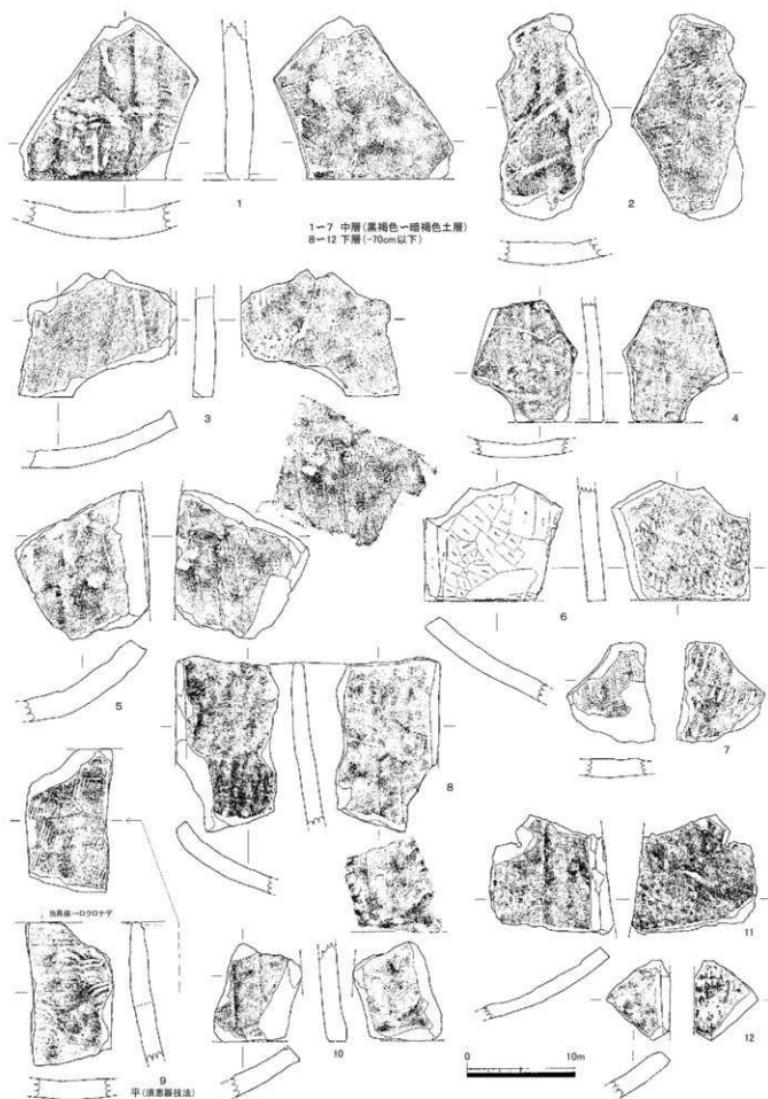


图24 SE037出土瓦(3) (1 / 4)(本図は全て平瓦)

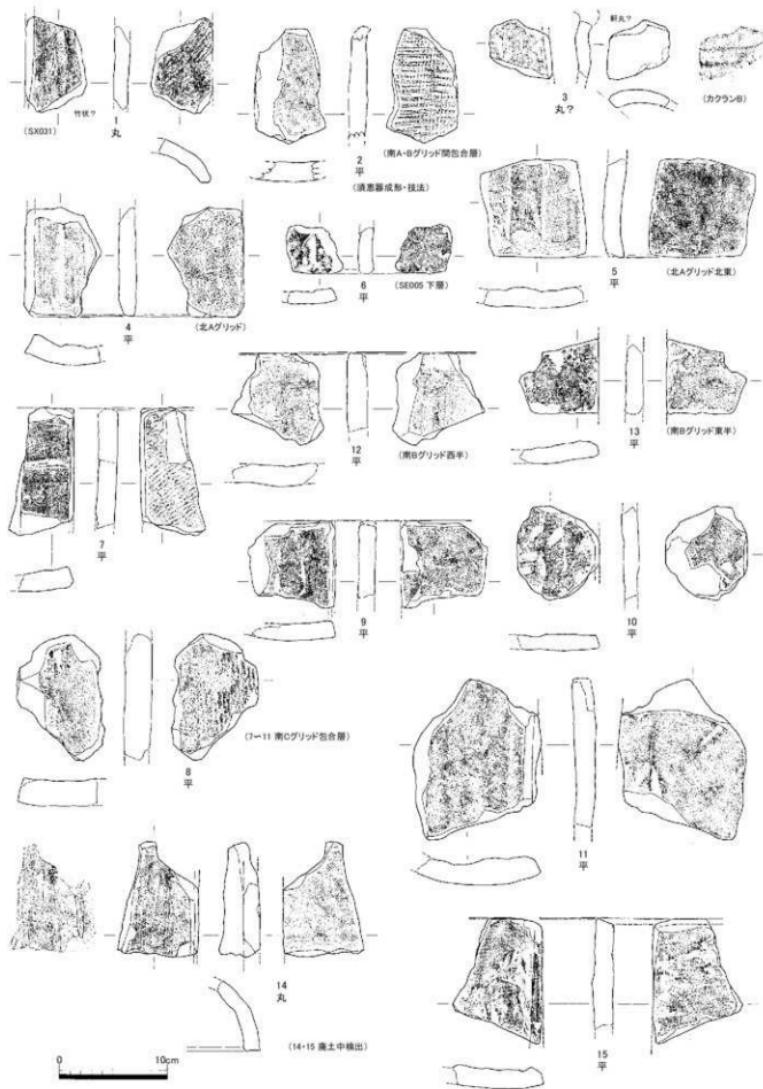


図25 那珂125次出土瓦(4)(その他遺構および包含層等出土瓦) (1/4)

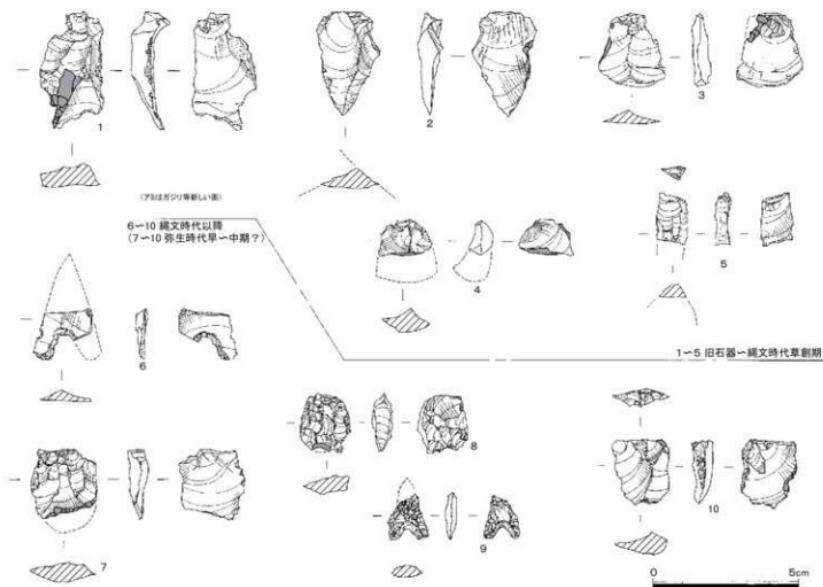


図26 剥石器(黒耀石)実測図(2/3)

005は中世後期以降の可能性(SD002を切る?)。015は15~16世紀。018は9世紀頃。SE026は井戸2基の重複。新しい026aは径1.0m前後の素掘り井戸。最新遺物から16世紀末~17世紀初頭。SD002は径2.5mとやや大きく、井戸側があつた可能性がある。026aへの混入遺物が伴う可能性があり、中世前期か。

(5)土坑(5K) 土坑は20基前後(大型柱穴を含む)がある。SK128、SK023・055、SK056などは大型柱穴であろう(図8右下)。SK214やSK211・212・213は中世の土壤墓か。SK010もその可能性があるが、SD002を切り、中世末以降(図2)。SK013(図8左下)は上部が削平されるが地下式土壤か。瓦質鉢や石臼が出土し、14世紀以降。SD008より古い。SK027(図8左中、PL.6-8,9)はSD008覆土上部にある径70cmの不整円形の浅い土坑。柱穴掘方の可能性。鋸型aが出土。切合からSC019より新しく、須恵器片を含む飛鳥時代の遺構である。

### 3. 出土遺物

(1)青銅器鋳型(図9) 鋳型は2破片で(鋳型a・b)、クリーム色気味の灰白色石英長石斑岩製で、片面(最終使用面)は巴形銅器下面の、その裏面は中広銅戈下半部の鋳型である(裏表紙写真、PL.2~5~8、PL.7)。直接接合しないが同一個体であろう。鋳型aは巴形の脚部3本分の部分で、鋳型bは、鋳型aの部分から120度右側の脚部2本分部分にあたり、本来は8脚の

図	石器No.	グリット	遺構・部位・土上記号等	器種	形式	保存状況	石材	表面風化	推定時期	備考/その他
SE001-1	SD005	SD008(3分の1)東・中段	使用面(下)30~45cm	剥離・剥落	使用面剥離材	完形	黒曜石	中	旧石器	先端部ガリ有り? ツル模様より下層出土
SE001-2	SD007	北E		剥片	剥離長石片	ほぼ完形	黒曜石	古	旧石器	ガリ有り
SE001-3	SD009	北E	西半包(吉吉型)一縫合 y=6~8	剥片	中長石剥離材	完形	黒曜石	古	旧石器	ガリ有り、全体表面(通路跡)影響か
SE001-4	SD010	北E		剥離・剥落	剥離材	破片(表面ガラス化)	黒曜石	古(一部無)	新石器	土器抹み跡付出土
SE001-5	SD016	SD009	「區」中層(下)黑色土	剥離・剥落	細石核・門型核?	多角形	黒曜石	古	縦・横直線	
SE001-6	SD001	SD001		石器	剥離・剥落	先端・中央大損	黒曜石	新	縦文束縫	
SE001-7	SD010	北・南C	通棧林出(1)	使用面剥離・剥落	剥離材	完形	黒曜石	新	縦文束縫・先生・中筋	御文様は垂直剥離か
SE001-8	SD002	南C	SD002 1~2区	「ひびわ石型」P-エスキュー	(ほぼ完形)	黒曜石	新	縦文束縫・先生・中筋	御文様二次剥離	
SE001-9	SD012	南C		石器	開口端	完形	黒曜石	新	縦文束縫・先生・中筋	
SE001-10	SD024		SD007 Ⅱ区・下層	使用面剥離・剥落	剥離材	完形	黒曜石	新	縦文束縫・先生・中筋	先端再生か
黒曜石	SD023	SD007 Ⅱ区・上層(高麗色土)		剥片	微長石片	完形	黒曜石	古	縦文束縫	御文様二次剥離
黒曜石	SD036	北E	西北包合層	剥片	微長石片	完形	黒曜石	古	旧石器	全面ガリ
黒曜石	SD029	SD368(SC345下)		石核	細石核	完形	黒曜石	中~古	縦文束縫	石核調整少なし

表1. 那珂125次出土剥石器一覧表

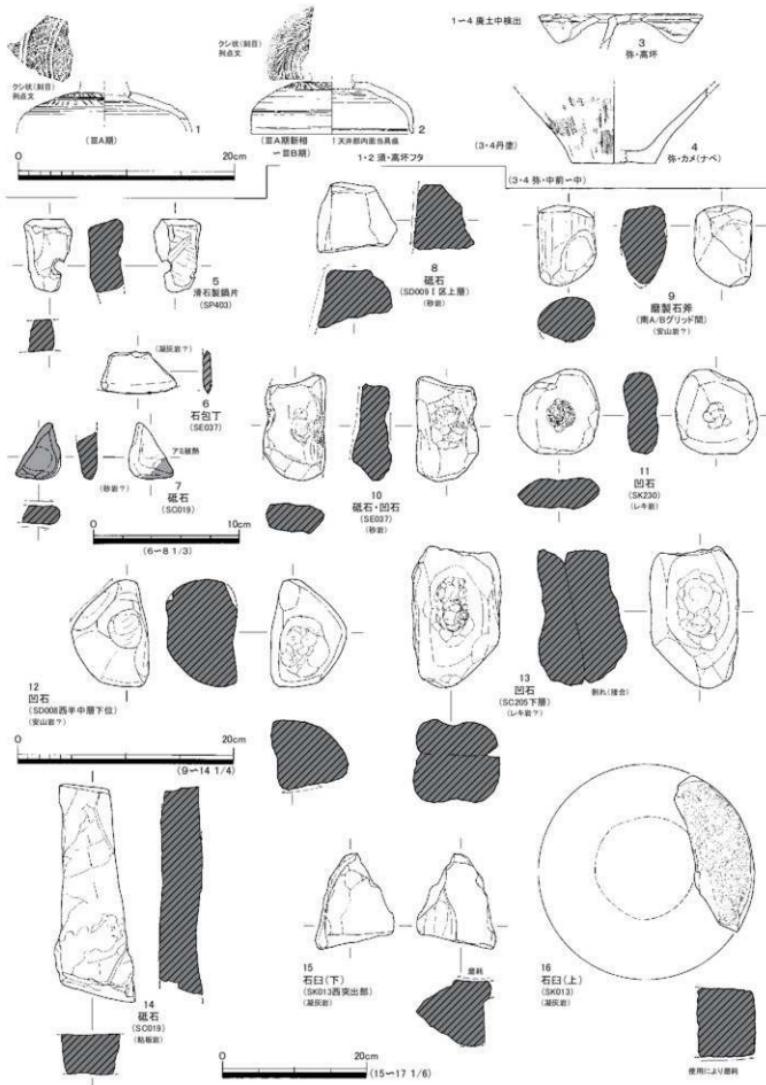


図27 廃土中出土土器(2)(1/4),その他石器・石製品(1/3, 1/4, 1/6)

巴形銅器が復元できる。鋳型aは10.75cm×9.1cmで、厚さ6.4cm、鋳型bは6.7cm×4.3cm、厚さ6.15cmである。合計して本来の約1/3周程度であるが、巴形銅器鋳型の本来の大きさは18.5cm×17cm以上と想定される。巴形銅器の復元径は、約15.0cm前後であり、最も大型の部類になる。巴形銅器面は非常に平滑で、脚部先端より一回り外側に割付のぶん回し内周線が残る。巴形面脚部外側で表面が剥離している部分（図面下方）は凹み、湯口痕跡の可能性がある。鋳型の一端には僅かな黒変部があり、鋳造履歴が考えられる。巴形面には、脚部下面鋳造面に綾杉文（羽状文）が彫られる。類例から、円錐上部を截断して断面台形状にした形の截頭円錐座に8本の脚部が付く式と推定される。現物は不明だが、文様・式型・法量などが、『柳園古器略考』（青柳種信）の「井原鍵溝」の巴形銅器の記録に類似する。銅戈面は表面の荒れが顕著で、何らかの再利用をした可能性がある。銅戈の全体形状と法量は不明な部分があり検討をするが、銅戈鋳型の再利用という点は、巴形銅器鋳型の構造推定や時期認定の上で意義深い。後世遺構から出土したが、本来は弥生時代条溝上層への廃棄か（図5）。

(2)土器・陶磁器（図10～25、27-1～4）紙幅の都合上、個々の説明はできない。挿図中に種類・器種・時期・調整などを略号で入れている。それら略号の凡例は以下の通りである。

（種類・器種）赤=赤土器、土=土器、須=須恵器、赤=赤土器（須恵器技法を用いた土器）、塗=製塗土器、黒=黒色土器（黒A=黒色土器A類、越=越州窯系青釉、竈=龍泉窯系青釉、白=白磁、陶=陶器、ガ=中近世瓦質土器、肥前=肥前系近世陶磁器、皿=小皿・皿、丸=丸瓦、平=平瓦、などカメ（窓）は機能的に煮沸・煮炊に使用したもの「ナメ（鍋）」とも注記する（カメ（ナメ）、調整など）ハ=ハラ切り、糸=（回転）糸切り、板=板目压版、ヘラ=ヘラ記号「ヘラ」と括書き、波=波状文、竹状=竹状模骨痕。（時期）中後=中後期半、中末=中中期末、中末／後初=中後期末と後初期の過渡的小様式期、後初=後初期半、後後=後期後半（以上の「井戸再考」第57回福岡文化財研究会発表要旨集、を参照）、ⅢA期・ⅢB期・Ⅳ期古相、中相・新相など=九州須恵器編年を修正したもの（市報第601集 pp.58-60、第933集 pp.29-31、第1034集 pp.16-17を参照）。

(3)飛鳥～奈良時代の瓦（図22～25）瓦類はほとんどが飛鳥時代の初期瓦で（註8）、7世紀後半～末頃の百済系単弁丸瓦もある（図22-1.2）。粗い格子目タタキのものはやや新相か（8世紀初頭まで）。丸瓦は基本的に無段式（行基式）で、大部分の個体の凹面に「竹状模骨痕」がある。一部に須恵器技法による製作が考えられる個体があり（図24-9・25-2）、百済系単弁丸瓦のようなうつ口墨窯成立期（V期）以降の瓦専業窯由来の瓦と、牛頭窯跡群の瓦陶兼業窯由来の瓦の二者があり、後者は桶巻を用いない「神ノ前」段階瓦も僅かに含まれる。

#### (4)石器・石製品

##### ・那珂125次調査出土の剥片石器について（図26、表1）

本調査では13点の剥片石器が出土し、石材は12点が黒曜石（表面風化が顕著6点、風化僅少6点）、1点が珪岩である。黒曜石は全てに新しい傷（ガジリ等）があり、埋没後に幾度も二次的攪拌があったと推定できる。ここでは10点を図化報告する。周辺の他資料との比較から、1～5が後期旧石器時代～縄文時代草創期、6～10が縄文後期～弥生時代前半期の資料と推定される。調査区内では、前者の古相資料が北A・B区に集中し、後者の新相資料は南・北C区と東側に集中する傾向があるが、本来の分布の反映を示すか不明である。1は縦長の剥離作業面調整剥片で、背面に上下からの剥離がある。左縁は自然面、右縁には刃こぼれ状の小剥離がある。2は寸詰りで先端の縦長剥片、3.4は寸詰りの幅広剥片。5は小型の縦長剥片。2～4は全て打点が左側に偏り「斜軸」剥片の形態。後期旧石器後半期の「今峰型」ナイフ形石器の素材生産に関連するか。6はやや大ぶりの剥片鐵で、先端と片脚を欠損。9は小型の開脚鐵で、先端を欠損。8はくさび形石器で、両側に削片剥離痕。7.10は寸詰りの縦長剥片で、打面を除く三方に調整、微細剝離がある。

（この項、吉留秀敏）

##### ・その他の石器・石製品（図27）

6.8.9.12は弥生時代、7.10.11.13.14は古墳時代後期～古代、5.15.16は中世である。

##### (5)鉄製品・鉄滓（図28）

1は27×35mm、厚さ5mm、横断面は匙状の鉄製品。下部が一度括れて裾が広がる。何かの飾金具の一部か。2は鉄滓で、おそらく鍛冶津であろう。いずれも共伴遺物の時期が不明確で評価が難しい。

本報告では、諸家の事情により遺構・遺物の詳しい説明や構造変遷のまとめ、および特筆すべき出土遺物である巴形銅器鋳型についての詳細な報告や考察をすることができなかった。これらについては、「福岡市埋蔵文化財年報」などで補遺報告を行う予定であり、ご覧をいただきたい。また本文中の註釈についても、補遺報告で補足したい。



図28 鉄器・鉄滓実測図（1/2）



1. 那珂125次調査遺構掘削状況全景(南から) ※条溝一部掘削状況



2. 那珂125次全景(東から)



3. SD008-I～III区上層下部～中層上部土器群  
(西から)



1. 弥生時代条溝土層断面d1-d2(東から)



2. 弥生時代条溝土層断面h1-h2(東から)



4. 弥生時代条溝土層断面k1-k2(東から)



3. 弥生時代条溝断面h1-h2上層下部土器群出土状況(東から)



5. 青銅器鋳型a(巴形銅器面)



6. 青銅器鋳型a(中広銅戈面)



7. 青銅器鋳型b(巴形銅器面)



8. 青銅器鋳型a(中広銅戈面)



1. 那珂125次調査区全景(遠景)(南から)



2. 調査区南東側南壁面(南Cグリッド南面)土層状況(北から)



3. 調査区北東側北壁面(北Cグリッド北面)土層状況(南から)



4. 確認調査時試掘トレンチ精査状況(東から)



5. 北Aグリッド(SD009上部含む)遺構検出状況(西から)



6. 南Bグリッド東半遺構検出状況(南から)



1. 調査区西半調査途中状況(東から)



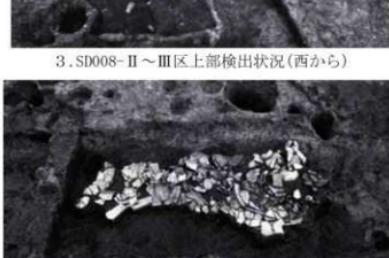
2. SD007-Ⅲ区上部遺構掘削状況(北西から)



3. SD008-Ⅱ～Ⅲ区上部検出状況(西から)



4. SD007-Ⅱ区中層下部土器出土状況(東から)



6. SD008東上層土器群出土状況断面(東から)



5. SD008東～中(Ⅰ・Ⅱ区)上層土器群(北から)



1. SD008中央(II区)中層下部土器群R7~10出土状況(東から)



2. SD009-I区中層下部土器群R1~7出土状況(北から)



3. SD009-I区中層下部土器群R1~7出土状況(東から)



4. SD009-II区西最下層土器R41~43出土状況(南から)



5. SD009-II区東上層上部土器群①(西から)



6. SD009-II区東/I区西ベルト上層上部土器群②(南東から)



7. SD009-II区東/I区西ベルト上層下部土器群①(南東から)



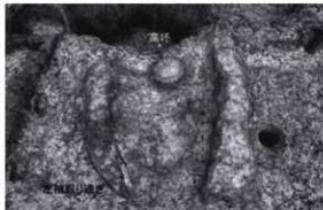
8. 条溝中央～東部完掘状況(西から)



9. 条溝西部(SD009)完掘状況(東から)



1 . SC019調査状況(貼床面まで)(北から)



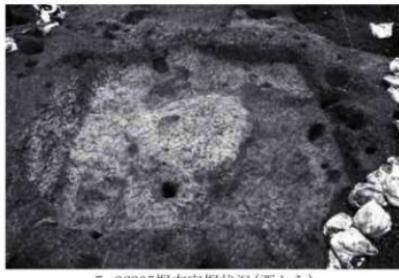
2 . SC019カマク調査状況(竈祭祀高環)(北から)



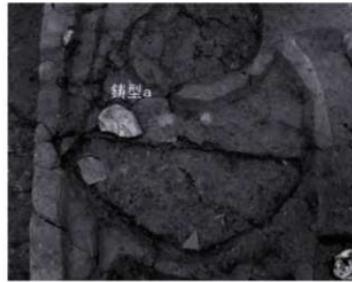
4 . SC205調査状況(貼床面まで)(西から)



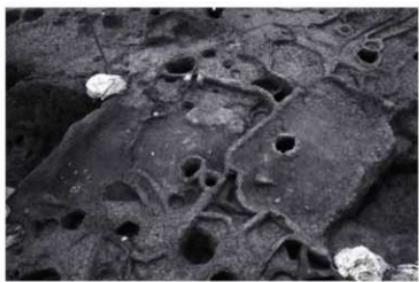
7 . SC031東半SX032土器群出土状況(西から)



5 . SC205掘方完掘状況(西から)



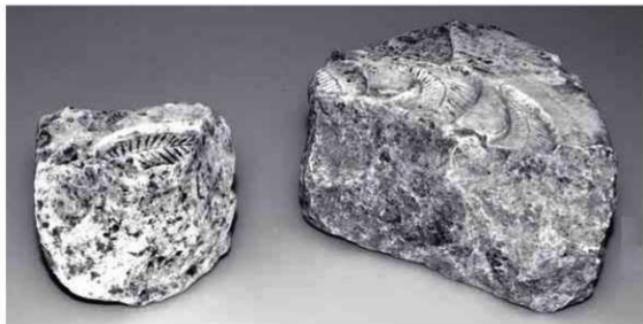
8 . SK027鋳型a出土状況(東から)



6 . SC233(左)・SC231(右)(北から)



9 . SK027土層断面写真(東から)



1. 鑄型 a (右)・鑄型 b (左)鳥瞰写真(巴形銅器面)



2. 鑄型 a (巴形銅器面)鳥瞰写真(湯口?側)



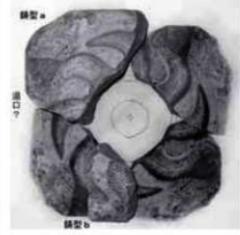
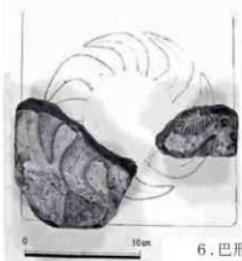
3. 鑄型 a (巴形銅器面)鳥瞰写真(左破断面側)



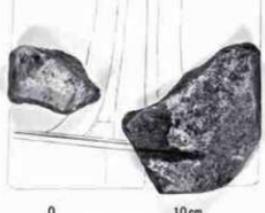
4. 鑄型 a (巴形銅器面)鳥瞰写真(右側面側)



5. 鑄型 a (銅戈面)鳥瞰写真(「内」側)



6. 巴形銅器鑄型復元案(※右は加工写真)



7. 中広銅戈鑄型復元案

PL.8



PL.8 遺物写真(「○-□」は挿図番号に一致)

## 報告書抄録

ふりがな	なか60ーなかいせきぐんだい125じちょうさのほうこうー
書名	那珂60
副書名	—那珂遺跡群第125次調査の報告—
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1155
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦2012年3月16日

### 調查基本情報一覧表

調査対象概要		調査結果	
遺跡名	那珂遺跡群	調査回数	125次
調査番号	0910	分布図面図幅名	37.塙原
事前審査番号	21-2-14	調査原因	共同住宅建設
調査期間	平成21年(2009年) 6月5日～同年7月22日	工事面積	620.92m <sup>2</sup> (地盤全面積)
検査地	福岡市博多区竹下五丁目36番地	調査面積	204.9m <sup>2</sup>

